

GATE～覇と碎と骸 彼の地にて、斯く暴れり

中タル爆弾

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

気まぐれでなんとなく書いて見ました！続くかも分からない上に更新ペースが遅くなると思いますが、それでもよければ是非見て下下さい。ちなみに、この作品は、ゲートの世界にモンハンのアカムトルムと臨界ブラキディオスにオストガロアを入れたらどうなるかな、と考えて書いた作品です。因みに、タイトルには「斯く暴れり」と書いてありますが、本当に暴れるのは時と場合によってなので、結構多いわけでもないです。

## 目次

お話の前にちよつとした作品紹介&モンハンから来るキャラ紹介

1

第1話〜3匹、特地へ行く〜

3

第2話〜特地にて〜

6

## お話の前にちよつとした作品紹介&モンハンから来るキャラ紹介

突然だが、貴方は『龍大戦』というものを知っているだろうか。モンスターハンターという世界が成り立つよりも遙か昔、現代を超える文明の中生きていた人々と数多の竜によって引き起こされた、歴史上最も大規模で、最も凄惨な終わりを迎えた戦争。なのに、未だそれに関する文献は両手で数えきれないほどしか発見されていない、謎に包まれた出来事である。その龍大戦は、人類と龍共に当時存在していた数の9割以上を失って終わりを迎えた。これは、そんな龍大戦を終わらせたといわれる7体の龍の内3体が、『ゲート』という異世界への門を通った先にある『特地』で様々な者と出会い、暮らしていくお話である。

〜ここで登場する龍の紹介（少し古代の文献に載っている感じで）

### 一体目

其の竜、異常なまでに発達した甲殻を持ち、いかなる武器も弾き返す。

其の竜、凶悪な牙と爪で、いかなる防具も容易く貫き、切り裂く。

其の竜、咆哮で火山を噴火させ、特殊な声を放ち、その声に当たれば、いかなるものも消滅する。

其の竜、又の名を『黒き神』『覇竜 アカムトルム』

其の竜に挑むことなかれ、逆鱗に触れることなかれ。

それでも尚彼の竜に挑み、そして打ち倒すことができたのならば、その者は英雄として、永久にその名を刻まれることだろう。

### 二体目

其の竜、火山の奥地に存在している洞窟を抜けた先にある、溶岩に囲まれた島で生息している。

其の竜、元の個体の突然変異で、頑強で緑がかった甲殻、その腕と頭部には黄色がかった粘菌が付いている。

其の竜、原種を圧倒するほどの力を持ち、また粘菌も異常なまでの爆発力を誇る。

其の竜、その圧倒的な強さから『臨界』と謳われる。

其の竜、名を『碎竜 ブラキディオス』。

しかし、たかが碎竜と侮るなかれ。彼の竜に覚悟を持たずして挑むならば、その者は彼の竜の拳と粘菌により、秒を数える前にその命を碎かれるだろう。

三体目

其の龍、数多の竜の骨を身に纏う。

其の龍、無尽蔵な食欲を持ち、数々の竜を捕食した故に、膨大な量の龍属性エネルギーを持っている。

其の龍、普段は地の中に身を沈めており、姿を見せることは滅多にない。

そのため、龍とは名ばかりで、その正体は不明である。

その龍、又の名を『奈落の妖星』『骸龍 オストガロア』。

もし彼の龍に挑んだのなら、その者は圧倒的な龍属性の力により声を出す間も無く消し炭になるか、喰われて彼の龍の一部となってしまうだろう。

三体の竜、それぞれが共存関係を持って生きている。

人語を解し、また話すこともできる。

寿命による死が存在せず、病にもかかることがないと言われる。

本気の祖龍をもいとも簡単に地に伏せさせる実力を持っている。

しかし、人類という愚かな存在が三体の竜の内どれか一体の逆鱗に触れたなら、人類は滅亡の道をたどることとなるだろう。

## 第1話く3匹、特地へ行くく

よう！いきなりの挨拶で悪いな。俺はアカム。名前でわかるようにアカムトルムだ。本当だったらもう本題に移りたいところなんだが、今ここには俺を含め合計3人(匹?)いる。だからそいつらの紹介もしなくちゃな。まず1人目。オストガロアのオストだ。多分この中で一番年長じゃないか？確かもう4桁は生きていたはずだ。それでも「まだまだ若い方だ。」とか言ってたな。・・・あいつの一族の平均寿命どのくらいなんだ？よし、今度聞いてみるとするか。

おっと、話がずれたな。じゃあ2人目。ブラキディオスのブラキだ。こいつは3人の中で一番真面目で一番若い。それでも300才くらいだから人間よりも長く生きてるんだけどな。ここに来たばかりの時はこの空間に慣れていなかったようだが、今ではすっかり馴染んでいる。あとこいつは苦労人(基本俺とオストが原因)な一面がある。

一応ブラキとは住む場所が同じこともあり、基本一緒に行動している。オストは住む場所が違うから、週に2回くらいのペースで来てる。

そーいやあいつって寿命以外にも謎があるんだよなあ。ここからあいつの住む『龍の墓場』まで結構な距離があるはず。例えるとするならバルファルクが全力で飛び続けて1日ぐらいと言ったところか。それなのに週2のペースで来ても疲れる様子もないそのスタミナ。他にも、あいつのいる龍の墓場には溶岩なんて一切なく、あるのは骨と、その周りを囲むように水があるだけだ。だけど、あいつはこの溶岩ばっかりの島で平然としてる。何が言いたいかというと、あいつの環境に対する適応力みたいなのが異常ってことだ。

2回くらい話からから脱線しちゃったかな？そろそろ本題に入ろう。信じられないことかもしれないが、よく聞いてくれ。結論から言うのだな・・・。

突然俺らの正面に門のような建造物が現れた。俺がこの建造物を



ブラキ「珍しいな、ほぼほ引きこもりのようなお前がこんなことに興味を持つなんて。」

だまらっしやい。とにかく理由は2つだ。まず1つ目。最近こちら一帯のモンスターが少なくなっている。簡潔に言えば深刻な食料問題だから、食料調達の為だ。

そして2つ目。おそらく後数十年もすればこの島が沈むだろう。それだったら今のうちに退避してしまえっこと。因みに沈むのはこの島だけだし、沈んだことで周りにも影響は出ない。

オスト「理由は分かった。俺もブラキも賛成だが、行った後はどうするんだよ?」

そうだなー。その場しのぎで?

ブラキ「なんで疑問形なんだ・・・。」

オスト「まあいい、このままここで立ち止まっても何も起こらないし、とりあえず行ってみようぜ!」

そうするか、よし、そうとなれば今すぐ出発だ!行くぞ!

「おう!」

おっとその前に、今まで住んで来たここにもお礼言つとかないな。

今までありがとうございます!

よし、別れの挨拶も済んだことだし、ようやく出発だー!



## 第2話く特地にてく

ふう。さーて着いた着いた。さあ！まずは何したらいいと思う？  
俺は周辺の探索だと思ふな。

ブラキ「食料調達。」

オスト「拠点作りだな。」

全員バラバラだなー。じゃあ各自分担してやってこうぜー。ブラキは食料調達、オストは拠点作りな。

ブラキ「分かった。」

オスト「いいぜー。じゃあやるか！」

そうしますか！

くNow loadingく

よし、周辺の調査は完了だ。どうやらここら辺は森らしいな。で、少し歩くと水源、森を出ると草原、さらに奥に行くといくつか村があるようだ。結構いい場所にてたんじゃないか？そういや道中大量の荷車と緑色の車があったな。それもついでに報告しとくか。さーて、終わったことだし帰ろ・・・

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

なんだ!?!さっきの大量の荷車があったところだな。急いで行ってみるか！

くアカム移動中・・・く

よし着いた！つてなんだあれ？

見た所竜っぽいな。体は赤くて・・・ふむ、炎を出すのか。なんかリオレウスみたいだな。

んで、基本陸では直立で活動、体格は俺と同じくらいかそれ以上・・・。

よし、あいつ今日の晩飯だ。

気づかれると面倒かもしれないけど、この世界の竜がどんな強さなのかも知っておきたいな。

うーん・・・普通に戦ってみるか！

おい晩飯い！特大の咆哮くれてやるからこっち向



ことだしもう簡易的でも完成はしてるでしょ？

・・・?!?なんだこの気配!?!後ろか!

さっきの斧を投げた女か?それにしても人間とは思えないほどの殺気・・・いや、これは「死」の匂い。

どういうことだ?たかだかこんな奴に俺を殺せるほどの力がある?だがここは未知の場所。何が起るかもわからないからな。取り敢えず警戒しておこう。

一歩、また一歩、歩き方はいたって普通。恐らく武器を取ってすぐ戦闘、つてことにはならないと思うが、まだ警戒は解かないでおう。

武器を取った。次の行動は・・・?何もしてこない?

「初めてね。私を見て逃げ出さない奴なんて。」

は?言葉がわかるだと?一応俺、オスト、ブラキの3人は人の言葉がわかるとはいえ、それはこちらが知っている言語のみ。俺は昔島の周辺を飛んでたのに乗ってた人から聞いた言語がいくつかあったから、あの2人よりは俺の方がまだ知識がある。それで、それがこの言語である、と考えると、俺たちのいた場所と、ここは、同じ世界にあるってことになる。だったらあの門は異世界への扉、というよりはただ遠い地へ移動させるワープゲートみたいな感じなのか。それにしても俺らの世界にこんな場所があったとは・・・。

言語が分かるのならコミュニケーションはだいぶ楽になる。うーん、じゃああそうだな、おまえは誰だ?

「あらあ、まずは自分から名乗るのが礼儀つてもものじゃないの?」

それもそうだな、じゃあ俺から。俺の名前はアカム。正式にはアカムトルムって言われてる。

「アカムトルム・・・聞いたことないわね。」

当たり前だろうな。俺がいた場所ですら、知ってるやつもほとんどいないレベルだったし。こっちの自己紹介は終わったぜ。今度はそっちの番な。

「私はロウリイ・マーキュリー。暗黒の神、エムロイの使徒。」

・・・?へー。よくわかんないけど分かった。なんかスゲー奴なん

だな。お前。

ロウリイ「あなた、絶対分かってないわね・・・。」

はは、すまんすまん。で？わざわざなんで声をかけてきた？

ロウリイ「そうそう、すっかり忘れてたわ。あそこに緑色の人たちがいるでしょ？少なくとも私はあの人たちについていこうと思うんだけど」

ど、どう？あなたも一緒について行ってみない？」

いいのか？あの人らには俺もついて行ってみたいが・・・あ！そういやあと2人ここに来たんだった！そいつらの許可も得ないとな！

ロウリイ「分かったわ。じゃあ許可をもらったらここに来なさい。頑張つて緑の人達に交渉してみるわ。」

分かった。それじゃ俺は戻るぜ。じゃあな。

「ええ、また会いましょう。」

♪Now loading♪

オスト「・・・・・・・・」

・・・・・・・・

オスト「で？かなり帰りが遅くなった挙句そこであった奴らの場所に行ってみないか、だと？その場合俺の作った拠点はどうなるんだ？」

あ、あかんオストさん久々にマジグレてるやつだ。えー・・・サーセンデシター。

♪アカム説教中♪

死んだと思った。いやマジで。オストさんいきなり最大威力のレーザー撃とうとするんだもん。ブラキが必死になつてなだめてくれなかったら・・・ブラキ様本当にありがとうございます。まあ、なんやかんやあつたけど、結局満場一致で行くことになった。そのためにも、気球の奴らからキノコを調達して来てほしいかな。よし、じゃあ一回溶岩島に戻ってくるわ！